

やっと秋らしい季節になりました。読書の秋、スポーツの秋、そして食欲の秋。たわわに実った稲穂。現在会員登録数 4,182 人さま。次号は 11 月 21 日発行の予定です！

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■
【1】お知らせ

● 講演会の報告集を販売しています

『2022 年度国際交流事業報告集 国際講演会「日本の子どもの本に描かれる「西洋」のイメージ -石井桃子翻訳作品からはじめて-』

(講師：スティーブン・チェ) 2023 年 8 月発行 880 円 (税込)

● 「むかしの紙芝居を楽しもう！」を開催します

大阪府立中央図書館 国際児童文学館との共催で、塩崎おとぎ紙芝居博物館 (三邑会) の紙芝居師による街頭紙芝居の公演を行います。

日 時：11 月 4 日 (土) 14:00~15:00

場 所：大阪府立中央図書館 2 階 多目的室 ※無料、申し込み不要

詳細は↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#05gaitokamishibai

● 講演会「中由美子と中国児童文学の世界」

中国児童文学翻訳者である中由美子さんのお仕事を振り返り、中国語圏児童文学の魅力について語り合います。

日 時：11 月 26 日 (日) 13:30~16:00

会 場：大阪府立中央図書館 多目的室 および オンライン

登 壇：秦文君さん (作家、中日児童文学美術交流中心会長) 他 ※通訳付き

定 員：会場 60 人、オンライン (Zoom) 100 人 参加費：1000 円

主 催：日中児童文学美術交流センター、中国児童文学研究会、IICLO

詳細・お申し込みは→ Peatix <https://nakayumikorec.peatix.com/>

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充て

させていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

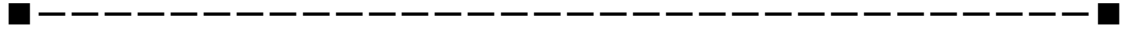
→ <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

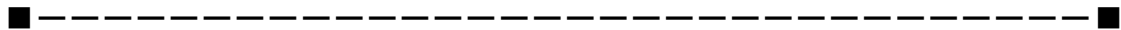
<https://www.youtube.com/@iiclol196>

公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● 当財団公式X（Twitter） → https://twitter.com/IICLO_News



【2】コラム



《1》この本読んだ？ Yasuko's & Yuri's Talk

『文月今日子の世界：最上級のロマンス・メイカー：50th Anniversary』
図書の家（小西優里、卯月もよ、岸田志野）/編集 立東舎 2023年9月 対
象年齢：大人

*今回のゲストは小西優里（Yuri）さんです。

<概要>

1953年に生まれ、1973年、『別冊少女フレンド』（講談社）7月号「フリージアの恋」でデビューした少女マンガ家、文月今日子についての本。デビューから50周年を迎えた文月への生い立ちから現在までのロングインタビュー、九州のマンガ研究会「アズ」の結成者で、北九州市漫画ミュージアム館長田中時彦の「「アズ」と「文月今日子」の出会い」というインタビュー、論考「ロマンス・メイカー 文月今日子の本領」（日高利泰）、マンガ家たちからのメッセージ、マンガ2編の収録などが、数多くのカラーのイラストとともに掲載されている。

Yasuko:総特集で文月今日子を取り上げようと思われた理由を教えてください。

Yuri:アンソロジー『マンガ化！世界文学 耽美とヒロイン』（萩尾望都・水野英子・牧美也子・美内すずえ・坂田靖子・文月今日子・山岸涼子・佐藤史生/著、図書の家・山田英生/編 立東舎 2022年9月）に、「白き森の地に」（ルイ・エモン/原作 文月今日子/マンガ）を掲載しました。そのとき改めて、文月今日子の作品が1970年代に幅広く読まれていたこととその価値に気づき、先生の足跡を1冊の本としてまとめておきたいと思いました。ちょうど、文月先生の画業50周年にあたり、先生がご自身の原画を北九州市漫画ミュージアムに寄託され、ミュージアムで原画展が行われるということで（「デビュー50周年記念 文月今日子展」 2023年9月16日～11月26日）、いいタイミングで本を出すことができました。

Yasuko:文月今日子作品の魅力は何ですか。

Yuri:まず、何ととっても、デビューの時からマンガがうまい！絵に安定感があって、ストーリーもテンポがいいので、どんどん読み進むことができます。女性はかわいく、男性は頼もしい、少女マンガの王道です。また、高

校から油絵を描き、美大に進まれた経緯もあって、背景が美しく、丁寧に描かれています。本当に多作で、『別冊少女フレンド』など月刊誌で活躍したので、短編の中に、家族もの、学校もの、ラブコメ、歴史ものなど、幅広いテーマを描いています。どの作品も短い中に、充実したストーリーがぎゅっとつまっています。

Yasuko: 私自身、10代のころ、文月先生のマンガを強く意識して読んだ記憶はないのですが、今回、作品を読んでみて、懐かしい気持ちがしました。そして、目が大きくておでこが広い主人公たちが周りに臆することなく、突き進んでいく様子が当時の少女読者を励ましたのかなと思いながら読みました。『銀杏物語』は、学校を舞台に子どもたちの友情が描かれ、子どもたちや周りの大人たちの繊細な気持ちが丁寧に描かれていると思いました。後の連載作品『金のアレクサンドラ』は、15世紀の中近東を舞台に、ヴェネチアから飛び出した少女が海賊などにも出会いながら旅をする物語で、船や港や街の風景が美しいと思って見惚れました。

ロングインタビューで、文月先生が、人物の造形に水野英子先生の影響があること、「日曜洋画劇場」が大好きだったと言われているところが印象に残りました。

Yuri: そうなんです。当時の少女マンガ家の多くが水野先生の影響を多大に受けています。そしてまた、文月先生の影響を受けたマンガ家も多くおられます。その系譜を残すことも重要と考えて、図書の家はこれまで、いろいろな少女マンガ家さんを集める本を作ってきました。

また、「日曜洋画劇場」の指摘もおもしろいと思います。水野先生の世代は洋画を映画館で見て、そこから絵やストーリーを吸収し、文月先生はお茶の間でもたくさん洋画を見た。それが作品作りにも影響しているように思います。

Yasuko: 図書の家の特集本は、年譜と作品リストが必ず掲載されているという資料的価値もあります。そして、ビジュアルが美しい。表紙の絵も読者を惹きつけます。

Yuri: ありがとうございます。できるだけ、原画のあるものは原画を使わせてもらい、色なども可能な限りオリジナルに近づけるようにしています。表紙の絵は、魅力的な少女の顔とともに、文月先生がいかに植物が好きで丁寧に描かれているかが伝わる絵だったので選びました。文月先生が好きだった人にも、これまで知らなかった人にもこの本を読んで文月作品の魅力について、少女マンガの歴史について知っていただければうれしいです。

北九州市漫画ミュージアム 「デビュー50周年記念 文月今日子展」

https://www.ktqmm.jp/kikaku_info/84105

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第98回「ガドルフの百合」

稲光りのなかで

「ハックニー馬のしっぽのような、巫山戯（ふぎけ）た楊の並木と陶製の白い空との下を、みじめな旅のガドルフは、力いっぱい、朝からつづけて歩いて居りました。」——これが書き出しです。

やがて、にわかには雲が重くなり、はげしい雷雨になります。稲光りの明かりのなかで、道の左側に「巨きなまっ黒な家」が見え、ガドルフは、玄関にかけこ

みます。声をかけても返事がなく、稲光りのガラス窓のむこうに何か白いものがいくつか、こちらをのぞいています。それは、百合の花でした。――「窓の外では、いっぱい咲いた白百合が、十本ばかり息もつけない嵐の中に、その稲妻の八分一秒を、まるでかがやいてじっと立っていたのです。」そして、ガドルフは、「おれの恋は、いまあの百合の花なのだ。(中略) 碎けるなよ。」と祈ります。

この童話は、「いなびかり／またむらさきにひらめけば／わが白百合は／思ひきり咲けり。」(歌稿 B193) などの賢治の行分け短歌の連作にあるモチーフが発展したものと考えられます。短歌は、1914(大正3)年に詠まれたものです。

「ガドルフの奇妙な心象体験を描いたものである。しかし、それは、心象展開の叙述であり、「物語」的な構想の中で、一つのテーマを追求するといったものではない。」といったのは、秋枝美保です(『『ガドルフの百合』』1993年)。秋枝は、「童話というジャンルにも入り難い作品」という川島裕子の意見(「ガドルフの百合」考)1991年)も紹介しています。そうでしょうか。詩的、象徴的なことばで心象風景を描く短編が、「童話」という大正期から昭和戦後にかけての日本の子どもの文学のありかたで(小川未明の「赤い蠟燭と人魚」などを思い出してください)、私は、「ガドルフの百合」のような作品こそ「童話」だと思えます。

「わが国創作童話の伝統という場合、私は「詩としての童話」をさす。これまでのわが国の童話文学はおおむね短篇の散文詩であり、そういう種類の作品に佳作が多かった。小川未明、宮澤賢治、坪田譲治などのすぐれた作品はみなそうだ。」と述べたのは、敗戦後間もない時期の関英雄でした(「劇としての童話を」『新日本文学』1950年1月)。「詩としての童話」が「劇としての童話」に変わったとき、「童話」が「現代児童文学」に転換することになります。

「詩は絵のように」とは、古代ローマの詩人ホラーティウスのことばですが、詩としての童話「ガドルフの百合」の読後にのこるのは、稲光りに照らし出されて立つ白百合の花のイメージです。(馬車別当)

(本文の引用は、新潮文庫版『ポラーノの広場』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 52

「ああ、とんでもないことになったものだ。」と、木馬はおもいました。「ぼくは、このとおり、おとなしい小さな木馬なんだ。そして、おばあさんのなたでころされそうになったり、地主のマックスには、こきつかわれてころされそうになったり、炭鉱では、生きうめにされそうになったりして、やっとたすかってにげてきたとおもえば、こんどは、火にくべられ、お金は、ぜんぶとられてしまうというのだ。ああ、ごしゅじん、ごしゅじん。ぼくは、ピーダーおじさんには、もうあえないのだ！」

(『木馬のぼうけん旅行』アーシュラ・ウィリアムズ/作 石井桃子/訳 中川宗弥/画 児童図書研究会/編集 福音館書店 1964年9月 p.110)

子どものころ、「木馬」と「ぼうけん」に惹かれて図書館で読んで感想文を書

いた記憶があり、再読してみることにしました。

木のおもちゃを作って生計をたてているピーダーおじさんは木馬を作りました。木馬は、涙を流して「あなたのそばをはなれたくないのです！」と言いますが、木のおもちゃが売れなくなり、おじさんは病気になって、二人は離れ離れになってしまいます。木馬は旅に出て、草かりをしたり、炭鉱で働いたり、王女さまと友だちになって競馬に出たり、サーカスで綱渡りをしたり、海賊に出会ったりして、お金をためたり、失ったりを繰り返しながらおじさんの元へ戻りたいと思いつづけます。

これでもかというほど、困難が襲いかかり、それでも人（木馬）の道にはずれないように生きようとし、周りの人にも助けられながら灘を逃れる繰り返しが読者を飽きさせません。そして、満足のいくハッピーエンドが待っています。

この作品は1938年に原作がイギリスで出版され、日本では、1964年9月に中川宗弥の絵で出版されています。今読むとどうしても古さは否めません。木馬が自分のことを必要以上に「おとなしい小さい馬」だと卑下する、つまり自己肯定感が低いということ、また、自分を作ったピーダーおじさんのことを「ごじゅじん」と呼び、対等には描かれていないこと、現代では使わない言葉も含まれていることなどが理由に挙げられます。

とはいえ、木馬がたった一人で、知恵を使い、旅をし、多くの人に出会い、富を得、ピーダーおじさんの元に帰るまでに波乱万丈の冒険をするこの作品が、2003年1月に福音館文庫（ペギー・フォートナム/絵）で収録されるとき「トイ・ファンタジーの傑作」「古典的名作」として選ばれた理由が納得できました。（Y）

《4》 行って来ました！

国立民族学博物館で12月5日まで開催されている特別展「交感する神と人ーヒンドゥー神像の世界」に行ってきました。展示の広報に、「ヒンドゥー教のあまたの神がみは、石や金属、土器、陶器などの立像、仮面、絵画や印刷物、タイル、刺繍、さらには絵本、コミック、切手やステッカーなど、さまざまなモノを通じて現れています。これらの神像は人びとが五感を通じて神と交流するための重要な媒体となってきました。」とあり、「絵本、コミック」という言葉に誘われて行ってみることにしました。

展示の構成は、ヒンドゥー教の歴史や神々の紹介がなされた第一章「神がみの世界へのいぎない」、ラーマやクリシュナ、シヴァやドゥルガー女神との交感や、祭壇を紹介した第二章「神がみとの交感」、つくる、飾る、見かわす、対話する、演じる、くらしの中の神がみ、という視点で紹介された第三章「交感の諸相」、四季を通じた祭りを紹介した第四章「ときの巡り」に分けて600点が展示されていました。

展示には、ヒンドゥー教の「ラーマーヤナ」「マハーバーラタ」などの神話に出てくる横笛を拭いているクリシュナ、猿のような顔のハヌマーン、頭がゾウのガネーシャなどの神様が、絵や人形や像として何度も登場しました。厳かな感じのもあれば、日本のキャラクターグッズを思わせるようなかわいい

ものもあり、人間味を感じました。

交感の一つとして、「飾る」ことが大切にされていることが興味深かったです。幼子クリシュナの像に着せる、スカートのような、キラキラした刺繍や羽飾りなどがついた衣装が何種類も展示されており、クリシュナの祭壇用ブランコがあったり、絵にもパールやビーズをつけて飾られていたりしました。また、20世紀前半に日本からインドへ輸出されていた、ヒンドゥー教を主題とした柄のマジョリカタイルや、ヒンドゥー教の神様をかたどった日本製の小さい陶器の人形があり、こんなところに日本とのかかわりがあるんだと思いました。

広報にあったコミックや絵本は、神話を子どもたちにわかりやすく紹介されているもので、塗り絵やシールなどと同じ場所に展示されていました。色鮮やかな神々は塗り絵にぴったりだと思いました。着せ替え人形、コミック、絵本、踊り、装飾など、遊びのルーツを見たような気がしました。(K)

国立民族学博物館 <https://www.minpaku.ac.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第5回

第2章 前川康男先生と今西祐行先生

その2 長編物語の創造

童話雑誌『びわの実学校』の校長は、雑誌を主宰されていた坪田譲治先生ですが、副校長は、創刊号からの編集長の前川康男先生（1921～2002年）でしょう。母宮川ひろがはじめて投稿した短編「たからもの」が第16号（1966年5月）に掲載されたあと、作品を見てくださるようになった今西祐行先生（1923～2004年）は、母の担任ということになります。私は、子どものころから、今西先生に、そして、前川先生にもお目にかかる機会がありました。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

■-----■

【3】全国のイベント紹介

■-----■

● 企画展示「子どもの本のはじまり -三宅興子 英語圏児童文学コレクションから-」

会 期：11月10日（金）～12月27日（水） 月曜休館

場 所：大阪府立中央図書館 展示コーナー、国際児童文学館

主 催：大阪府立中央図書館 国際児童文学館

協 力：大阪国際児童文学振興財団（IICLO）

● 古田足日シンポジウム「子どもの味方・子どもの見方 古田足日の仕事から考える」

日時：11月25日（土）13：30～16：00 参加費無料、要申し込み
場所：神奈川近代文学館
主催：白梅学園大学、白梅学園短期大学子ども学研究所 古田足日研究プロジェクト
共催：県立神奈川近代文学館、（公財）神奈川文学振興会

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント

■ ----- ■
今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『文月今日子の世界』を1名様に、また、北九州市漫画ミュージアム「文月今日子展」の招待券を5名様、B2ポスターを2名様にプレゼントします（協力：立東舎、北九州市漫画ミュージアム）。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス (5)このメルマガのご感想 (6)ご希望の品をお書きのうえ 応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/75YvRyEG3DgSaSmP9>

締切は11月10日（金）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

何年かぶりに本格開催となった秋の催しの数々。地元の手づくり芸術祭も会場数やイベントの数を増やし準備に大忙し。先日は、そのワークショップやパフォーマンスの会場のひとつとなる広場の草刈りと小石ひろいに参加。気持ちの良い汗をかきながらも、子どもたちの笑顔が目につかび、疲れが吹っ飛びました。（TA）

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp